KITA URAYASU 浦

KITA のつくる「浦」と、
浦安のかつての「浦」が、
重なった。

URAYASU ART PROJECT ?
〈浦安藝大〉

アジア、オーストラリア一帯を往還して生きる渡り鳥たちは、気候が変動しようとも毎年 10 月
1950年代に入ると江戸川上流部で工場汚水放流事件が起こるなど東京湾沿岸の海域汚染が進み、
の第 3 週頃になると浦安の海岸に広がる干潟「二番瀬」に降り立つといいます。二度の埋立によっ
浦安の漁業は衰退し始めました。このような転換期に 1959 年頃に日本プラスチック社から浦安町
て拡張したこの街の「わたしたち」は、どこからきたのでしょう ? このプロジェクトでは、隔た
に対し、海面の一部を埋め立て、東洋一の遊園地を作りたいという申し出などがありました。そ
りを渡りながら生きる鳥たちのように、浦安に元あった / 今もある海と陸の境界線（= 浦 ）を巡
こで、町では、議会、漁業協同組合ともども海面埋め立てについて協議を進め、1959 年千葉県に
り、その時間と空間の境に停留するための場を計画していきます。かつての浜にあった海の家、
対し、大規模遊園地の建設を主体とした埋立事業の促進を要望しました。（中略）1962 年に漁業
いまある護岸から海を眺める桟橋、昔の堤防にやってくる舟、あったかもしれない岸辺の遊び ...。
権の一部放棄が決定され、1965 年から第 1 期の埋立土地造成事業が始まり、1975 年に埋め立てが
これらをみんなで妄想し実現を目指していくことで、常日頃から境界を跨ぎながら暮らす浦安の
完了。また、1971 年には漁業権の全面放棄がなされ、翌 1972 年から第 2 期海面埋立土地造成事
日常を可視化してみたいと思います。（KITA 「《浦浦》企画書」より）
業が始まり、1980 年に埋め立てが完了しました。（浦安市ホームページ「海面埋立事業」を参照）

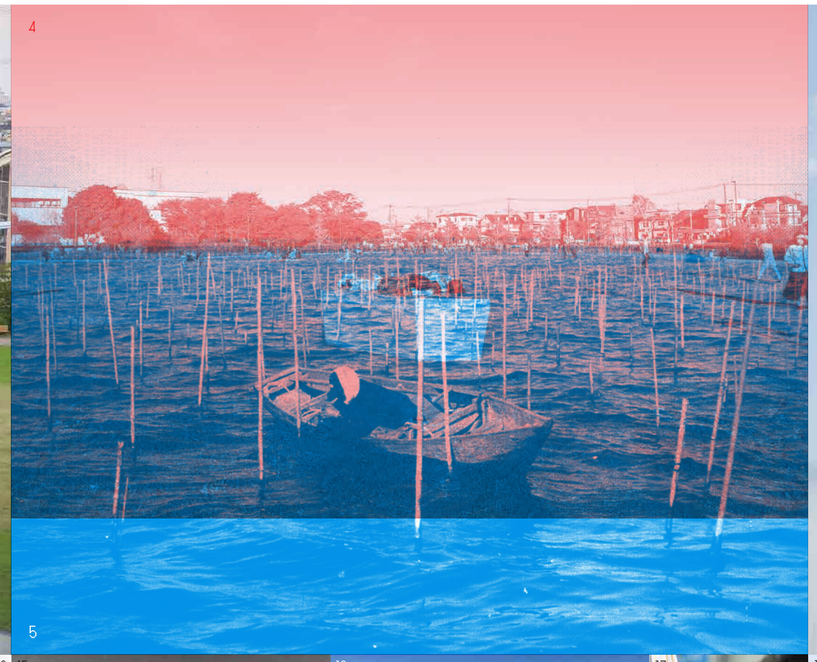
浦浦 Ura-ura

《浦浦 Ura-ura》は、2023 年に開催した浦安アートプロジェクト『浦安藝大』において、アートコレクティブの KITA が展開したプロジェクトです。KITA は、浦安をリサーチするなかで、二度の埋め立てによって街が拡張してきたことによる、風景や時代の境界に着目。文化や国籍の異なるメンバーからなる KITA 自身と重ね、「隔たり」を越える方法について模索していきました。海と陸の境界、またそこでの人の営みを「浦」と捉えたことから、埋め立て以前の海岸線だった場所に過去と現在をつなぐ「浦」をつくり出していくプロジェクトを計画し、それを《浦浦》と名付けました。まちなか展示（2023 年 10 月 20 日 –11 月 5 日）では、かつての海の行楽地“海楽園”や“秋山の金魚池”と呼ばれた金魚の養殖池があり、埋め立てによって姿を変えた一帯に位置する浦安公園に、20 メートルの「桟橋」を設置。その周辺に舟やベンチ、パラソルや渡り鳥のオブジェを配置することで、KITA 流の「浦」をつくり出しました。展示期間中には、親子、学生、散歩に立ち寄る近所の方々に親しまれました。桟橋を歩く、船に寝転ぶ、ベンチでおしゃべりする、そうした人びとの営みと作品、また桟橋から響く波打ち際の音が一体となり、公園の地面の上にかつての水面が想起されることで、ふたつの「浦」の重なりを描き出しました。

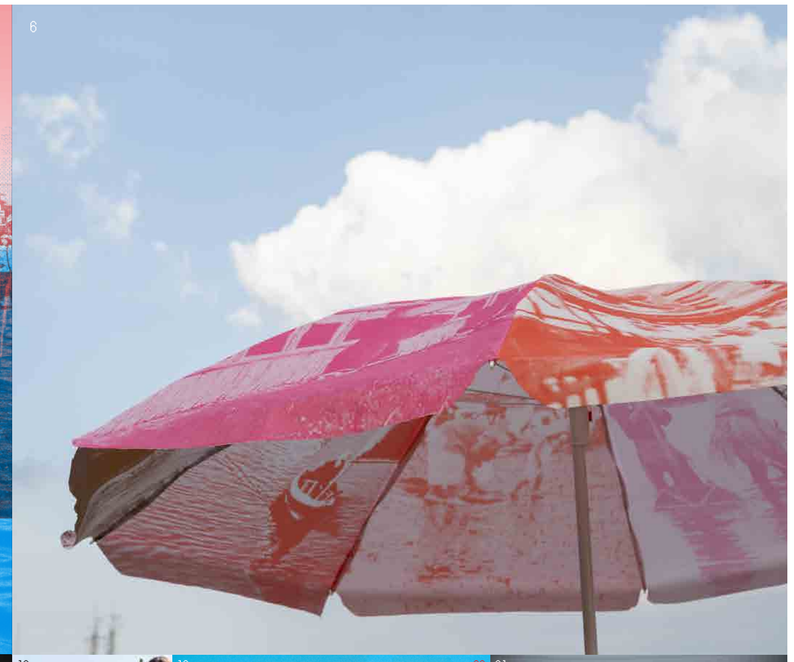
KITA

日本とインドネシアを拠点とするメンバーによって、2022年に結成された拡張するアート・コレクティブ。インドネシア語で、わたしたちを意味する「KITA」。さまざまな形態の作品をとおして、境界をつくる言葉でもあり、境界をなくす言葉でもある「わたしたち」を探る。メンバーは、アディティヤ・プトラ・ヌルファイジ、アナスタシア・ユアニタ、北澤潤、シティ・サラ・ライハナ、津田翔平、能作淳平、ミヤタユキ、ムニフ・ラフィ・ズディ。

3


4

5


6

7

8

10

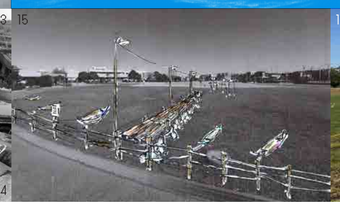
9

11

12

13

14


15

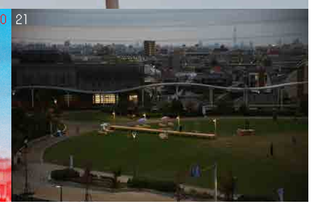
16

17

18

19

20


21

KITA の視点から描いた

「浦浦」ができるまで

ワークショップ：わたしたち（KITA）の実験室

2023 年 8 月 11 日、浦安市にて「わたしたち(KITA)の実験室」と名づけたワークショップが行われた。それまで各自でリサーチを重ねてきたの日本とインドネシアのメンバーが一堂に集まった。会場の会議室に、用意してきた「ロンバ」づくりのアイテムを並べていく。「ロンバ」というのは、インドネシア語で「日常のものを使った競技」のことだ。「競技」といっても、小さいころに友だちと自由に生み出してきたような「あそび」のイメージに近い。新しい「ロンバ（あそび）」をつくることで、世代も立場も言語も文化も住んでいる場所も飛び越えて、みんなで真剣に遊んで笑い合えるといい。

参加者が続々集まり KITA の活動紹介やインドネシアに関するクイズからスタート。日本から見たらツッコミどころ満載の「ロンバ」の写真や動画を見ながら、会議室に笑い声が響きはじめる。子どもも大人も好奇心が膨らみ始めたころ、あるロンバをやってみることに。6 本にわかれた紐が蜘蛛の巣のように中心に集まり、そこから下に一本の紐が伸びていて、先にはペンが結んである。その下には一本の瓶が置かれている。紐を腰に結んだ 6 人と周りの全員が一丸となって、その瓶にペンを入れる。シンプルなゆえに奥深い。ペンが瓶をかすめる度に、会場の全員が大声で一喜一憂し、大いに盛り上がった。

後半では、KITA と参加者がチームを組んで、それぞれのロンバを即興で作り出した。100 円均一で集められるような身近なアイテムを元に、ロンバづくりに集中していく。日本語、インドネシア語、英語が行き交っているにもかかわらず、会話をどうするかと悩んでいる様子はなかった。「伝わらなくても伝わる、知らないけど知っている」、そんな共通言語とも言える「ロンバ（あそび）」を題材にすることで曖昧になったお互いの境界。普段頼りにする言葉を使わないことで、国や文化の境界を越えて新しい「わたしたち」をつくる試みの第一歩であった。

作品プラン：《浦浦》

2023 年 9 月。浦安での発表も来月にせまり、連日オンラインミーティングを重ねていた。ある日、KITA の制作に欠かせないサポートメンバー渥美の趣味である釣りの話に話題が広がった。「釣りって見えない水面の下を想像するんですよね。じっとしているように見えて頭は動きつづけてます。異界との接続というか …」と渥美が言う。「異界との接続、点？をつくれないかな」とミヤタ。これまで議論を重ねてきた他のメンバーにとって、この抽象的な言葉は作品プランに直結する予感に満ち満ちていた。

二度の埋め立てによって街と海の境界線が変動してきた浦安。かつての境界線はいま何気なく歩いている歩道だったりする。堤防の名残も確認できるが、もはや不可視となっている場所も多い。埋め立て、陸と海の境界線、その変動によって見えなくなったかつての海辺。浦安で「異界との接続点」をつくることはできないだろうか？浦安の「浦」とは、海と陸の境界。つまり海岸、湖岸、浜辺。またその辺りの漁村などの共同体を指す。浦安のかつての「浦」といえる、埋め立て前の浜辺や堤防付近、海岸の漁村、今はない海水浴場や海の家について調べていった。今現在の「浦」と言える、浦安市を含む千葉県 4 市が面する 東京湾奥部の干潟・浅海域、「三番瀬」の生態系にも着目。「浦安市三番瀬環境観察館」にも訪れた。護岸で隔たれている海にアクセスし、今の浦安の「浦」をきれいに保って楽しみ、それを子どもたちへと伝える「浦安水辺の会」の活動を知ることができた。アサリ、イソガニ、ハゼ。人間だけでない「わたしたち」についてもっと考えてみたくなった。ヒバリ、シギ、ウミネコ、カモ。多様な鳥たちの中には、毎年決まった時期にこの場所に飛来する渡り鳥たちがいることも知った。鳥たちが行き来する広大なルートは「フライウェイ」と呼ばれ、その最大規模のひとつである「東アジア・オーストラリア地域フライウェイ (EAAFP)」は、ロシアやアラスカ、東アジアと東南アジア、更にオーストラリアやニュージーランドまでが含まれるという。日本もインドネシアもここに入る。彼らの視点では、「隔たり」なんてちっぽけだ。鳥たちのように、自由に行き来ができたらいい。

過去の浦・埋め立てによって街が拡張していき、見えなくなった漁村の暮らし。今の浦・護岸に隔たれながらも、確かにある自然と人間の営み。浦安には、今は見えない / 今も見える「浦」がたくさんある。いたるところ、あちこちに存在する、という意味をもつ「浦々」を捩 (もじ) って、昔と今、可視 / 不可視の浦を、同時に出現させ重ね合わせるという意味を込めた《浦浦》をタイトルとした。わたしたちは、ここで、かつての浦との時間の隔たりを越える。そのむかし浜辺があり、海水浴場があった「浦安公園」に、見えなくなったはずの かつての海辺 (異界) と接続する場をつくることにした。

制作・設営：地面／水面

メンバーそれぞれのスケッチや図面、共有しあった画像などをもとに、すこしずつアイデアがかたちを帯びていく。いくつもの案を経て、《浦浦》の中心は「桟橋」となった。陸から海へとつながる桟橋のイメージは、「境界を越える」こととぴったりだった。市役所や博物館、図書館など街の中心的な機能があつまるエリアにひろがる「浦安公園」は、1 日の移り変わりに応じて、満遍なくあらゆる年齢層の市民に広く使われている。早朝はウォーキングやジョギング、午前中は幼稚園児たちの遊び場、昼は昼食おわりの会社員たちの休憩場、夕方は小中高生たち の遊び場、ペット連れやご高齢の方がたのお散歩コース。設営期間中、公園の一部にみるみる伸びていく桟橋。大・中・小の舟は、芝生を水面に見立てて、桟橋のまわりに停留する。カラフルな色で昔の写真が印刷されたパラソル。それを見上げるように置かれたビーチサイドの (ような) ベンチもある。夕暮れ、桟橋の柱の天辺 (てっぺん) についた電球が点々と灯る。寄せては引く波の音が、一帯に響く。暗くなると芝生は見えづらくなる。この地面は水面かもしれない。夜は想像を掻き立てる。ここは海辺かもしれない。最後の作業を終えた津田と北澤が、桟橋に腰掛ける。ちょうどよい暗さを残した浦安公園の夜で「異界と接続」した気がした。

10 月 21 日には、展示されていた真っ白な渡り鳥にペイントをするワークショップが、浦安市三番瀬環境観察館を舞台に開催された。浦安水辺の会にも協力いただきながら、三番瀬の渡り鳥や生き物について学び、それぞれの鳥たちをつくり出した。カラフルに彩られた渡り鳥は、境界を越える象徴として浦安公園に展示された。

展示期間・撤収：まぼろし

浦安公園のボテンシャルと《浦浦》の相性は抜群だった。桟橋を駆け回り、船に腰掛け、ベンチでくつろいでいる人がいると、昼でもそこは浜辺に感じられた。何よりも桟橋の底から響いてくる波の音が、この場が海辺を想像するための空間であることを表している。「ねぇねぇ、ここ海ってこと ?」、探索する子どもたちがひらめきを伝えてくる。ウォーキングで桟橋を往復。犬の散歩の途中に桟橋で撮影。舟の上でおしゃべり、パラソルの下で宿題。浦安公園のいつもの景色が、「浦」の営みに見えてくる。そんな「浦」の可視化がピークに達したのは、「浦安細川流投網保存会」とのコラボレーションの瞬間だった。風物詩だったこの漁法の光景を後に残そうと、投網保存会は 1995 年に結成された。無形文化財となり、い まも月に二度、ここ浦安公園で活動をおこなっている。展示最終日、桟橋に停留する舟の上から、見事な同心円を描いて地面 / 水面へと広がっていく網。この光景を新しい風物詩にしたい。

展示の会期が終わり、桟橋が解体されていく。「撤去しちゃうんですか ?」の声は、もはや桟橋の存在が日常となった人たちから多く聞かれた。「わたしたちの海とベンチがなくなってる！」と女子高生が騒いでいた。桟橋がなくなり、元の芝生の公園に戻る。「なにか足りない」と感じたとしたら、それも新しい日常のはじまりだ。大・中・小の 舟の一部は、投網保存会の活動で使われる投網の舞台となり、過去の写真を写したパラソルは郷土博物館に収蔵されることとなった。

「浦浦」のおわりに

もしも、この「桟橋」のように、浦安のあちこちのかつての海辺に、例えば「海の家」や「テトラポッド」「堤防」「灯台」「漁港」といったランドマークを作っていったらどうなるだろう？埋め立ては、過去を未来で上書きすることかもしれない。そこには是非では語れない葛藤が眠っている。ただ、そうした場所を「想像の海辺」に置き換えることで、過去と現在の隔たりを乗り越え、「どちらも同時に生きる」ことができる。それが《浦浦》というビジョンだった。桟橋から流れる音を聞くと故郷を思い出す、と毎日通ってくれた方がいた。かつての浦安でもなく、離れた誰かの故郷とつながる。街が拡張してきたということは、人口が流入してきたということであり、ここには不可視の故郷が無数に存在している。日本とインドネシアの音を融合した「海の音」に対するその方の反応を聞いて、海が隔たりであると同時にとつながりでもあることを、最後に思い出した。

《浦浦》監修：KITA

サポートメンバー：渥美雅史
中山源太　三橋れいな　櫻井莉菜
屋宜初音　イマ・ヒクマトゥル　・ハサナ

協力：浦安水辺の会
浦安三番瀬を大切にする会
浦安細川流投網保存会
浦安市三番瀬環境観察館

運営：浦安藝大事務局、浦安市生涯学習課

浦安アートプロジェクト
「浦安藝大」
主催：浦安市、東京藝術大学

《浦浦》ドキュメント

監修・編集・デザイン：KITA
写真：浦安藝大事務局（No.1、6、17、18、20）
浦安市郷土博物館所蔵（No.2、5、12、13、14）
KITA（その他）
付録：二色フィルム
発行：浦安市、東京藝術大学
発行日：2024 年 3 月 25 日